
背中合わせ

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背中合わせ

【Nコード】

N0092F

【作者名】

さすらいのかえる

【あらすじ】

ひよんなことから、自分より頭の良い女子高生の家庭教師をやることに、そして……

第一話

この子頭良いな。それが彼女に対しての第一印象だった。

大学授業が終わり、家に帰ろうとしていた時に俺を呼ぶ声がした。

「進藤君」

振り向くと同じ大学の工藤愛子が居た。学年も同じ一年だ。

「お願いがあるんだけど？」

工藤のお願いを断る男はまずいないと思う。男連中で、大学の女子で誰を彼女にしたいと話をすれば確実上位ランクするはずだ。けど俺はちよっとした理由？ で女子全般が苦手なので工藤もそれに漏れずに苦手だった。

「な、なんですか？」

工藤の話によれば、俺に家庭教師のバイトを替わって欲しいらしい。何で俺なんだ？ それも今からとか、ありえないんだけど。そして勢いに負けて引き受けた……。お礼に今度デートしてくれるらしい。いい。いい。

引き受けてしまったので、めんどくせーと思いつつ、その家に大学から歩いて向かう。やたらデカイ家に着いた。かなり金持ちそうだ。思い切って呼鈴を押す。

家政婦さんが出てきて家に通された。何部屋あるんだよ、ここすげー。一つの部屋で待つよう言われ少しすると、女の子が入ってきた。俺の相手する子は、女の子だった！ ヤバいかも。き、気を取り直して挨拶する。

「はじめまして、工藤さんから紹介された。同じ大学の進藤です。よろしく願います」

「逃げた……」

彼女が小さく呟いた。俺は聞き逃さなかった。なんだ？ そのうちわかるかな。少し気になるがスルーする。

「山下和音です。お願いします」

「じゃあ早速始めようか」

「はい」

彼女の部屋に通される。やっぱり彼女の部屋もデカかった。俺の借りてる部屋より広いよ。勉強を始める事にした。

（10分後）

「お兄さんバカですね」

容赦ない言葉が……それは良いけど、兄と呼ぶのは止めて欲しい気持ち悪い。嫌な事を思い出す。つかあのヤロ（女だけど）性別ぐらい言え、女の子だったら引き受けなかったのに。はぁもう遅いよな。

「お兄さんは止めて」

「え？」

「呼び方変えてくれない？」

「じゃあ先生？」

「いやそれだと、君より俺が頭よさそうだし」

「わがままですね。進藤さんとか？進藤君？」

「いっその事呼び捨てで良いよ」

「良いんですか？」

「俺の下の名前は伊織ね」

彼女は戸惑いつつ呼ぶ

「イオリ？」

「うん。それでいこう」

俺たちは「山下さん」「イオリ」と呼び合う事になった。

うん。これで少し安心だ……。

第一話（後書き）

なんとなくかなり前に書いた作品をブログから引っ張り出し、少し直してアップしてみました。完結している作品なので、定期的にアップしますので良かったらお付き合いお願いします。

第二話

呼び方は一応決まったが、もう一つ言わないといけない事があった。

俺はハッキリ宣言するように言う。

「山下さんに勉強で俺が教えられる事は何もない！」

あきれたように彼女が言った。

「開き直りですか？」

「いや違う。次からどうするって話？違う人にする？」

「私はカテキョなんて必要ないんですよ。親が勝手に頼んでるだけで」

相当嫌なようだ。確かに彼女には必要無さそうだ。

「頭良いもんな」

「イオリが辞めたとしても、どうせ親が別の人連れてくるんです。私に干渉しないなら続けて良いですよ」

「了解。次もくるわ」

「16歳でヒモを持つとは思いませんでした」

「ひど」

「さっき私がイオリをバカ呼ばわりしたのに、なんで怒らなかったのですか？」

「事実だしなく。あ！もしかして、これまで来た家庭教師を怒らせたりして、辞めるように仕向けてたのか？」

「そうですよ」

「なるほど、工藤さんに何言ったの？」

「ナイショです」

「そこをなんとか？」

「まだイオリは、私の質問に答えてないです」

「あ、怒らなかつたってやつね。だから事実だからだよ」

「でも普通怒りませんか？」

「例えば山下さんが、高校一年だと言われたとしても怒らないですよ？」

「その例えはどうかと」

「じゃあ別の見方で、俺は勉強できる事に価値を持ってないんだよ。できる人を凄いと思うけどね」

「うん」

「できない事は格好悪いのかな？ できる人に助けてもらえば良いじゃん。っで俺も何か違う事で助ければ良いじゃないかなと思う。そんな感じわかった？」

「なるほど、わかりました」

「っで山下さんの答えは？」

「工藤さんと呼ぶ時おばさんと呼びました」

それはえぐい。俺は笑いながら言う。

「グッジョブ」

2人で笑う。これならどうにか続けられるかな。

彼女が笑いながら言った。

「イオリは凄い人ですね」

第三話

凄くないと思うんだけどな……。

「あ、まだ仕事の内容話してなかったですね」

そう言えば俺何も知らずに来たんだよね。」

「そうだね。教えて」

「えゝ決まっているのは、週3日で時間は一日2時間ゝ3時間、日当は2万です」

単純計算で一ヶ月で24万!? マジかよ。まさしくヒモだね。

「良いのそんな貰って?」

「まあ良いじゃないですか親が決めた事ですし、都合が悪い日とかあります?」

「特にないけど、この時間なら」

今、俺はサークルもバイトしていないので夕方から夜は暇だった。

「携帯持ってます」

「あるよ」

ポケットから携帯を出しつつ言うと彼女が俺の携帯を奪った。何かを入力している。五分ほどで帰ってきた。俺の一ヶ月間のスケジュールが決まっていた。

「私の番号とメルアドも入れといたので何かあったら連絡下さい」
「すげゝ」

どうやったらこんなしつかりするんだろ。俺より大人な気がした。ちなみに今日は金曜で、月、水、金とやることになった。

「後一時間あるんで、イオリは本でも読んでいて下さい」

彼女はそう言うと言と勉強を始めた。俺は完全に子どもあつかいらしい。本棚にある本を物色する。少女マンガが結構ある。何となくほっとする。一冊とってみると、ん? その時気付いた奥に何かある。前にある本をどかし後ろにあったの取り出す。

「あ!」

後ろで焦っている彼女の声が聞こえた。俺の行為がバレたらしい。

「それは駄目です」

もう遅いよ。取り出した本を読んでみる。えゝ男同士が色々します。詳しく描写したくないので察して下さい。BLとかやおいとか言われる本かと思われます。

あ！後ろから彼女に本を奪われた。

「駄目って言ったじゃないですか」

涙目なんですけど、悪い事したな。素直に謝る事にした。

「気になったもので、ごめんなさい」

彼女が恐々聞いてきた。

「軽蔑しますか？」

「別にしないけど」

「え、もしか「違うから！」」

俺は即否定した。女の人は苦手だがそういう事ではない。

「人の趣味に対して、どうこう言う事はない。自分が好きなものを否定するやつは嫌いだし、だから俺もしないよ」

「そうですか。元に戻しておいて下さい」

取り上げられた本が戻ってきた。何だか彼女は嬉しそうだ。俺は本を元に戻し最初にとった少女マンガを読む事にした。

「あ、もう時間ですね」

言われてみれば、もう二時間以上経っていた。俺何もしないよ。

「こんなんでほんと良いの？」

「これまでで一番楽しかったです」

「そっか」

彼女が机から封筒を取り出し俺に差し出した。

「はい」

「え？」

「今日の分です」

「ひ、日払いですか？」

「ですよ」

「さらに直接現金ですか」

「です！」

それを俺は受け取り、家政婦さんに挨拶して帰る事にした。

これから週3日家庭教師という名目で、彼女の家遊びにいく事になったらしい……凄いい事になったもんだ。

第四話

月曜になった家庭教師の日だ。今日も大学に言ったが、まだ工藤には会っていない、文句を言わねば！でも、結果的に良いバイトを紹介してもらった事になるのか？お札を言うのは何だか嫌だな。山下さんからは、たまにメールが来る。学校での出来事などが書いてある。けど俺は素っ気なく返す。ベタベタしてもしょうがないでしょ。

彼女の家に着いた。相変わらずデカイ。行く事をメールで連絡していたからか？家に入ると彼女が迎えてくれた。挨拶しつつそのまま彼女に付いて部屋に行く。

部屋に入ると彼女が俺に聞いてきた。

「今日はイオリどうします？」

何か逆なような？俺も聞いてみる。

「山下さんはどうするの？」

「私ですか、今日は数学と科学やります。イオリは？」

確実に俺は教えられないな。まあ、どの教科も無理だけど。

「俺はこの前の漫画の続きを読むよ」

ちなみに奥にある方をチャレンジしようかと。

「そうですか。大人しくしてて下さい」

「はい」

やっぱり逆じゃないこれ？

淡々と時間が流れる。彼女がノートに字を書く音と、俺が漫画のページをめくる音だけが聞こえる。

「イオリ面白い？」

急に話しかけられて反応が遅れる。

「い、以外といける。面白いかも」

「そうですか」

「・・・休憩しないのか？」

「二時間くらいならしませんよ。まあ、イオリがしたいならしても良いですが」

「じゃあしたい」

彼女は持っていたシャープペンを置くと立ち上がって少し嬉しそうに言った。

「飲み物とお菓子でも持ってきます」

彼女は部屋を出て行った。俺だけ広い部屋に一人だけ残る。何だか急に寂しい気持ちになった。彼女はいつもこんな気持ちを感じているのだろうか？ それとも慣れれば平気なのか？ 部屋が広いってのも考えものだな。

何だか眠くなってきたかも、今日は1限からの授業で早起きしていた。

帰って来ないな……いつの間にか俺は寝てしまっていた。

第五話

何だか体が重い??

ここは何処だ? 周りが暗い……状況がわからない。なんだっけ、俺は何してた?

体重いしなんだこれ? あ……思い出してきた彼女の部屋だ! つか、俺寝たのかヤバ過ぎる。

暗い所に目が慣れてきて体が重い原因が分かった。彼女がなぜか? 俺に抱きついて寝ていた。

最悪だ……気持ち悪くて、全身に鳥肌が立つ、彼女を揺すって起こそうとするけど、力が入らん、くそ! 反射的に毒づいてる自分がいた。

「ん?」

「山下さん起きて」

起きたかな? 彼女と目が合うと、微笑えんでまた抱きついてきた……ちよつと……まじでやばい。寝惚けてんのか?

限界だ……俺は彼女を渾身の力で無理矢理引き離すと、近くに有ったゴミ箱に吐いてしまった。吐いたら少しだけ落ち着く。

彼女を見ると戸惑っているのがわかった。そりゃそうだ。客観的に見て、これはかなりハードな展開だろうな……。

「ごめん。寝た事と部屋汚して」

彼女は首を振る。

「えーと、お金いらない今日帰るから」

どうにかそれだけ言って部屋からでようとしたら、後ろから彼女の心配そうな声が聞こえた。

「イオリ?」

「気にするな。大丈夫だから」

余裕がなくて、切り捨てるように言ってしまった。

彼女の顔が見れない。そのまま俺は玄関を出て家に帰った。
家に向かって歩きながら思う、まだ俺は駄目なのかな……。

帰り道が概要に長く感じた。

第六話

久しぶりに夢を見た。母親に殴られる夢だ。俺の母親は不安定で、よく泣いていた。そして、気晴らしか？俺をよくボコボコにしていた。虐待ってやつか？俺を殴った後は、いつも泣きながら、「おにいちゃんごめんね、ごめんね」と謝って俺を優しく抱きしめるのがパターンだった。あ、母親の呼び方は、俺には弟がいるので、そういうことです。

携帯を見ると、彼女から心配するメールが来ていた。何だか悪い事したな……でも何で俺に抱きついて寝てたんだ？あゝ考えてもしょうがないか。心配しないで平気な事と予定通り水曜は行く事をメールした。

今日も1限から授業がある。俺は授業の支度をして大学に行く事にした。

1限の教室に着くと早速工藤にあった。俺の横に座ってきた。

「おはよ〜」

「おう」

「何機嫌悪い？約束のデートしてあげようか」

「いらない」

「むう」

「何断られたの初めて？」

「うっさい」

「お前もうるさい静かにしてろ」

「今日の進藤君いつもと違うね」

「……」

「無視ですか？」

「……」

「かまってよ」

あゝ俺の負けですよ。

「なに？」

「家庭教師はどうだった？」

「ぼちぼち」

「ふゝん可愛かったでしょ？」

「かもね。毒舌っぽいが」

にやりと笑って言ってやった。

「う、聞いたの？」

「聞いた」

「サイテゝあの子性格悪過ぎ」

俺は呟くように言った。

「お前もどうかと……」

「なに！」

「なんでもない」

授業そっちのけで喋っていたら少し気分良くなったかも。その時、授業の終わりの時間になった。今日何も聞いてないよ。やば。

「工藤ありがと」

「え、なに？」

「工藤と話して気分転換できた。助かったよ。だからありがと」

「……」

工藤耳まで真っ赤になってる。珍しいもの見たかも。

次の授業始まりそうなので、俺は急いで教室を出た。後ろから俺を呼ぶ声が聞こえたような気がするが無視する。

その後、学食でお昼を食べていると知り合いの男どもの質問攻めにあった。1限の授業中工藤と隣同士に座って、話をしていたのが噂になっているらしい。うざいぞお前ら、俺は適当に否定して逃げだした。

午後の授業も終わり、俺は家に帰る事にした。昨日から続い

た気分の悪さは無くなっていた。

第七話

帰り道を歩いていると、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「イオリ」

不安そうに彼女が立っていた。

「どうしたの予定は明日でしょ？」

「謝りたくて」

「俺は大丈夫だから気にする事無い」

「でも……」

立って話していてもしょうがないか、周りの目も気になるし。

「どっかの店に入ろう」

「あ、はい」

近くにあったファミレスへ入る事にする。店員さんに案内されて、4人掛けのテーブルに向かい合うように座った。彼女は思い詰めた顔をしている。

「あ、あの」

俺は遮るように言う。

「山下さん何か食べる？」

「そうじゃなくて……」

「ん？ ドリンクだけ？」

「だから私の話を聞いて下さい！」

「怒らんでも良いじゃん」

「私が真剣に謝ろうとしてきたのに、凄い心配したのに……」

「ごめんなさい」

「何でイオリが謝ってるの！」

「えゝ酷いな」

「あゝもうどうでも良いです。心配して損しました」

うん。それで良い。

「何で笑ってるんですか！ほんとにほんとに心配したんですよ」

「さっきから心配しか言っていないぞ」

「く」

「んで、何注文する？」

「……はあ」

「ため息つくと幸せが逃げるぞ」

「……」

俺たちは、その後30分ほど雑談して、会計で少し揉め……結局割勘に落ち着き、また明日と別れた。

奢ろうとしたのにな。あと、上手くごまかす？ フォローできた気がしたんだけど、別れ際の彼女を思い出すと……俺を少し心配そうに見ていた気がした。

はあ。なかなか上手くないもんだね……。

第八話

今日で家庭教師3回目だ。

前回は何もしてない、いや最初から何もしてないよな。今日も大
学があったが、特に事件はなかった。けど、俺と工藤の噂がまだ色
々流れている。鬱陶しいな。

大学から彼女の家へ歩く。だいぶ慣れてきたかも。家が見えてき
た、いつも思うデカイ！ 今日家に入ると彼女が出迎えてくれた。
前より服装に気を遣っている？ 全体的にいつもと違うような。

俺は服を見ながら言ってみる。

「いつもと雰囲気が違うんじゃない？」

彼女は何もいわず、ただ嬉しそうに笑った。

彼女の部屋に通される。何となく入りづらい。俺が躊躇していると彼女が言った。

「もう襲わないので、入って下さい」

普通逆じゃないそれ？ いつも通りテーブルを挟んで向かい合う
ように座る。

「イオリは何も聞かないんですね」

「ん？ 聞いて欲しいのか？」

「わからないです」

「じゃあ気にするな」

俺は気を取り直して言う。

「今日は何する？」

「一応、英語と国語やる予定です」

俺は何しようかな？ と思っていると彼女に聞かれた。

「イオリは何します？」

「そうだな。いつも漫画読んでてもしょうがないから、何か手伝う
事あるならやるよ」

彼女は少し考えてから言った。

「漫画読んでいいですから、私の側にいて下さい」

「え？」

「だから近くに居て……じゃなくて、前回みたいに目の前でゴロゴロ漫画読まれると気が散るんです」

彼女の声が途中からどんどん小さくなっていく。それに比例して顔が赤くなる。

「ん」

どうしよう。俺が考えていると。彼女が呟く。

「やっぱり嫌ですよね」

まあいいや。前回のお詫びだ。俺は自分に嘘を吐いているのかもしれないな……。

俺は立ち上がると、本棚から何冊か漫画を持ち出して、彼女の後ろに背中合わせで座った。背中越しに相手の体温を感じる。

「こんな感じでどうでしょうか？お嬢様？」

「……」

後ろを少し見ると彼女の耳が赤い、俺は気にせず漫画を読む事にした。その後、二時間ほど、彼女がノートに書き込む音と俺の漫画のページをめくる音だけが部屋に響いていた。

終わりの時間になった。今日の分の給料を受け取り、挨拶して帰った。

第九話

家庭教師のバイトを初めて一ヶ月が経った。

信じられない事だが、彼女の成績が伸びている。彼女が通っているのは、週一回テストがあるとかいう、進学校らしいのだが、そのテストで学年の5位以上をキープしているとか……。

「前は20位前後だったんですよ」

とか言ってた……それでも凄いと思うが、伸びた理由を彼女に聞くと、

「背中合わせ効果です！」

という事らしい。あれからいつも家庭教師の時間になると、約2時間くらい背中合わせで好きな事を勝手にやるという決まりになった。好きな事と言っても彼女は勉強、俺は彼女の部屋にある本をダラダラと読むだけ、そろそろ全部読み終わりそうだった。

彼女の家に入ると、いつも通り彼女が出迎えてくれた。最近思うが親ってどうしてるんだ？

部屋に着いた。彼女の向かい側に座る。気になった事を聞いてみる。

「山下さんの親って何やってるの？」

「親ですか？」

「そう」

「いません」

「え？」

「まあ、いるけど、いません」

「そっか」

彼女の頭をぽんぽんと撫でる。暗くなっていた顔が笑顔になった。俺は特に何も言わず、背中合わせに座り直す。最初のうちは緊張もするし抵抗もあったのだが、最近は自然に出来るようになった。それが不安でもあるのだけど……。

「イオリ？」

ぼくとしていたら、終わり時間になったらいい。今日は、ほとんど漫画を読んでいない。彼女が心配そうに見ていた。

「あゝ悪いぼくとしてた」

「はい、今日の分です」

彼女が少し悲しそうに見えるのは気のせいだろうか。俺は特に何も言わずに受け取る。そして帰る事にした。

「じゃまた。次は明後日か？」

「はい。そうです。お疲れさまです」

「おう、お疲れ」

家に向かって歩きながら思う。何で俺は金を貰って、こんな事してんだ？

なんだか俺たちの距離がズレ始めていた……。

第十話

最近工藤は、俺と同じ授業の時に隣へ座ろとする。そのおかげで？ 工藤との噂は消える気配がない。はあく何にもないのに……。

「おはよう」

俺の隣の席に座ると工藤が言った。

「何？ 挨拶くらい返しなさいよ」

「……おはよう。最近遠慮なくなってきたな」

「え、そうかな」

「その方が良いよ」

「……」

うあ、なんで赤くなってるんだ？ また珍しいもん見た。

「あ、まだ、バイトつづいてるの？」

話そらした？ まあいいか。

「つづいてるけど何で？」

「あの子は、二回以上つづいた人いなかったから」

「まじで」

「結構有名」

「それ紹介したのかよ」

「あはは……ごめんね」

やばい。一瞬かわいいと思ってしまった。

その後、工藤と授業中も小声で話をしていた。この授業、最近いつも聞いてないな……まあいいか。授業が終わり、次の授業は工藤と別なので別れる。

「じゃ待ち合わせは学食ね」

「は！？」

「さっき一緒に食べようって言ったじゃん」

いや、そんな話はしてない、つか今周りに聞かれてるから！ さすが工藤策士。

「わかった」

負けましたよ。

工藤は笑顔で手を振って去っていった。工藤は傷付けたくないな
ゝ。はあゝ。

午前の授業が終わり。俺は学食へ向かって歩いていた。

「うあ」

突然腕に重圧が……工藤が腕に抱きついている。やばいって、嫌
悪感が抑えられない。

突き飛ばそうとするのをどうにか堪える。

「びっくりした？」

「……」

工藤が抱えている俺の腕を抜き取る。工藤から少し距離を置く。
どうにか落ち着きたい。

怪訝そうな顔をしている工藤に言う。

「先行ってて」

「どうしたの？」

「何でもないから」

「何でもないじゃないじゃん」

俺は工藤から離れるように歩き出す。

「何で？ 私のせい？」

後ろから涙声が聞こえる、振り向くと工藤が泣いていた。
はあゝ。またやってしまった。自分を嫌いになる。

方向転換して、工藤に近づく頭を撫でながら言った。

「工藤のせいじゃないから」

工藤が何か言いたそうだったが、俺は歩いて側を離れ。

第十一話

昨日の事があって俺は何だかブルーだった。でも、仕事は行く。彼女の家で背中合わせ勉強法（勝手に命名）を実施していた。

「イオリ何かありました？」

背中越しに彼女が聞いてきた。何だが顔が見えないのも話しやすいかも。

「女の子を泣かせてしまったので落ち込み中」

彼女が動揺しているのがわかる。

「げ、原因は何ですか？」

「腕に抱きつかれて拒否したというか？」

彼女の呟く声が聞こえた。

「私だって我慢しているのに」

「我慢してたんだ」

「いや、違います」

耳が赤い可愛い……って俺何考えてんだ。

「その人の事イオリは好きなんですか？」

「なんで？」

「落ち込んでいるのでしょ」

「周りにいる人が俺のせいで傷つくのが嫌なだけ」

彼女がほっとしてるがわかる。背中越しで話すと相手の事が良くわかるんだな。

凄くこの瞬間が大切に思えた。背中合わせて安心する。

どうしようもなく彼女の背中が愛おしかった。そして彼女自身も……。

自分の気持ちに気付いてしまった。

まあ、気付いたからって何も変えるつもりはないのだけど……。

「イオリ時間です」

終わりの時間になったらしい。俺は立ち上がって彼女を見た。こ

んなに可愛かったっけ？

つか、俺は何意識しているんだ。彼女は封筒を俺に差し出して言った。

「はい、今日の分です」

「いない」

つい言ってしまった。

「え？」

彼女がビククリしている。そりゃそうだよな。あゝ何もかも面倒くさくなってきた。

「あゝ帰るから」

「ちょっと待って」

俺は彼女を振り切って、そのまま帰った。

彼女からメールが着た。俺が怒って帰ったと思っているらしい、否定するメールを送っておく。

俺は何やってるんだろうか？

ガキだな。

第十二話

大学の授業が終わり。家へ帰ろうと歩いていると俺を呼ぶ声がした。

「進藤君」

声の聞こえた方を見ると工藤が立っていた。デジャブ？

「前もこんな事あったよね？」

自分が思っていたことを言われて少し戸惑う。

「……」

「少し付き合ってよ。歩きながら話そ」

「りょうかい」

最近、俺はこの前の事があったので、工藤を避けていた。けど工藤は俺を見付けて話しかけてきた。凄いな、俺には真似できない。

「この前ごめんね」

「いや、気にするなよ」

「うん……わかった。あのさ……」

「なに？」

雰囲気が変わるっていうのかな……次に来る言葉に備えて、俺は覚悟を決めた。

「私、進藤君の事好きだよ」

「うん。でも「ストップ！」」

俺が断りの言葉を言おうとしたら止められた。

「なんだよ」

「はぁ、何で家庭教師のバイト紹介しちやったかな」
「すげー女って。」

「何でわかるの？」

「女の勘？」

「マジで」

「まあ、それもあるんだけど、進藤君が楽しそうにバイトに行くの

がわかるからかな」

「あゝ」

「その様子だと自分でも気付いたみたいだね」

「まあね」

「ロリコンだと」

「おい。ちがうから！」

「ちがくもないじゃ？」

「いやいや」

「はあゝ」

「なんだよ？」

工藤が急に真面目な顔になって言う。

「私の事避けないで」

「……わかった」

「じゃまたね」

「おう」

話をしている間に、彼女の顔がどんどん暗くなっていくのが切なかつた。

最後、泣くのを必死に堪えている顔が忘れられない。

優しく出来ないのが辛かつた。

最終話

前回の事があるので、少し気まずいんだけど、彼女の家に行く。彼女は特に何も言わずに部屋に通してくれた。向かい合うように座ると彼女が言った。

「何でこの前受け取らなかったのですか？」

あ、やっぱり気にしていたのか。

「なんとなく？」

「イオリはズルい」

「え？」

「ズルいんです。今まで平気だったのが平気じゃなくなる」

「うん」

「勘違いしそうになる。私と同じ気持ちなんじゃないかとか」

「……」

「この空間、時間を壊したくない、でも寂しいんです。イオリは何で私をさんを付けて呼ぶの？ 名前で読んでよ！」

彼女の本音を聞いたのは初めてかもしれない。俺がビククリして答えに詰まっていると彼女が言う。

「今のは忘れて下さい。取り乱しました」

「良いの本当に忘れて？」

「……ダメです」

俺は気持ちを隠すのをやめた。

「かずね。好きだから」

彼女が笑顔になって言う。

「はい。私もイオリの事好きです」

俺はおもむろに立ち上がると、本棚から読みかけの本を取り出し彼女の後ろに背中合わせで座る。彼女の体温を感じる。

ノートへ字を書く音と、本をめくる音だけが響いていた。

<完>

おまけ！ 『その後の二人？』

並んで歩いていると急に立ち止まってかずねが言う。

「イオリ腕組んで歩きたいです」

「無理」

「工藤さんはしたのに？」

「え！ 何で知ってるの？」

「あ、やっぱり、あれは工藤さんか……」

こわ！ なんか呟いてるし……俺はかずねの手をとり繋ぐ。

「アレは無理矢理だったから。これでかんべん！」

かずねは笑顔で言った。

「しょうがないですね」

俺たちは手を繋ぎ歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0092f/>

背中合わせ

2011年1月12日23時11分発行